L2 読解での付随的語彙学習とテキスト理解
－Involvement Load 仮説の認知面の要因の効果を検証する－

吉澤　真由美

学位取得年月：平成 24 年 3 月
取得学位名：人文科学博士
学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】付随的語彙学習、　テキスト理解、　Involvement Load 仮説、　関わり度、　読解

【要旨】

母語(以下 L1)、第二言語(以下 L2)ともに大半の語彙がテキスト理解やコミュニケーションの成立等を目的に付随的に学ばれるとされる(Nagy et al. 1985;　Nation 2001 他)。これを付随的語彙学習という。L2 では未知語を見逃すなどして L1 に比べ付随的語彙学習の効率が悪い。これまでに読解を中心に、辞書や語注などを活用し学習効率を高める研究が行われ、一定の効果が確認されている(吉澤 2005)。しかし、何故、ある条件で他の条件よりも付随的語彙学習が進むのか、その要因は解明できていない。

そのような中、Laufer & Hulstijn(2001)により Involvement Load 仮説(以下、IL 仮説)が提唱された。語彙学習には動機面の「必要性」、認知面の「検索」と「評価」の 3 要因が関係する。より多くの要因に関わる条件で、語彙学習への「関わり度」(Involvement)が大きくなり、語の処理が深くなる。その結果、語彙学習が進むと主張する。IL 仮説により、研究ごとに断片的に出されてきた結果を、共通の要因を用いて総括的に捉えることが可能となる。IL 仮説は付随的語彙学習が進む条件を解明する上で重要なツールと成り得ると期待される(Nation & Webb 2010)。しかし、まだ仮説検証が十分には行われていない。また、語彙学習を対象に出された仮説で、テキスト理解の達成は分析対象としておらず、語彙学習が進んでも、テキスト理解が阻害されたら本末転倒になる等の問題が残されている。そこで、本博士論文では、IL 仮説の「関わり度」の効果をテキスト理解も含めて明らかにすることを目的とした。

日本語学習者(L1 中国語)、初級 49 名、中級 46 名、上級 32 名で合わせて 127 名が実験に参加した。実験では、より操作が可能な認知面の要因に絞り、検索と評価の 2 要因に関わる条件(以下、2 要因条件)、評価のみに関わる条件(以下、評価条件)、検索のみに関わる条件(以下、検索条件)、いずれにも関わらない条件(以下、統制条件)を設けた。IL 仮説の予測では、2 要因条件＞評価条件、検索条件＞統制条件の順で「関わり度」が大きく、語彙学習が進むことになる。読解後、語の意味を答える語彙テストと筆記再生の読解テストを行い、「関わり度」の効果が異なるのかレベルごとに調べた。なお、実験では初級でも理解可能なように対象語以外は全て初級学習者が学習済みの文法と語彙からなるテキストを全レベルで用いたが、実際にはレベル間でテキスト理解の程度に差が出た。そのため、初級は L2 能力が低くテキスト難度がより高い読解、上級は L2 能力が高くテスト難度がより低い読解となった。

分析の結果、語彙テストは、初級でテキストが難しい読解では、2 要因条件で関わり度が小さい条件に比べテスト得点が有意に低くなるなど IL 仮説と逆の結果が出た。一方、中級では、2 要因条件は 4 条件の中で 2 番目にテストの得点が高く、関わり度の効果が出始めた。そして、上級でテキストが易しい読解では、2 要因条件で他条件よりも有意にテスト得点が高く、IL 仮説を支持する結果が得られた。読解テストは、初級でテキストが難しい読解では、2 要因条件で一部の関わり度が小さい条件に比べテキスト理解が阻害されていた。しかし、中級や上級では、2 要因条件でもテキスト理解が阻害されることはなかった。

IL 仮説では「関わり度」が大きいほど、語彙学習が進むとされる。しかし、実際はその様な単純な関係ではなく、「関わり度」に加え、学習者の L2 能力、テキスト難度も考慮に入れ付随的語彙学習が進む要因を明らかにする必要性が本研究により示された。

(よしざわ　まゆみ)